

下士が上士を倒す日！

大阪では、橋の下から出てきた政治家が人気です。少なくとも彼は上士の生まれではないでしょう。橋の下ですから。

徳川幕府、上士の侍が政治を動かしていた時代が存在しました。しかし、上士が率いる、長州征伐の幕府軍、送り込んだ数十万の兵隊たちは、坂本竜馬が薩摩から長州に送った武器によって、あっけなく倒されます。上士の敗北です。下士である、坂本竜馬が上士の幕府を倒すのに大きな力を発揮したことは間違いのない事実です。一方、それを指揮した高杉晋作、土農工商の身分、階級を無くした奇兵隊を立ち上げます。そして、幕府は倒れ、新明治政府へ。初代総理大臣は、下士出身の伊藤博文です。当時、力を発揮した、大久保利通、西郷隆盛、福沢諭吉などは皆、下士なのです。

さて、話は変わりますが、最近の成長企業を見ていると、地方出身のオーナー企業が多いですね。代表されるのがニトリ、北海道出身です。なぜ、成長できるのかを考えてみましょう。

まず、閉塞感のある今の時代、危機状態です。危機管理の鉄則は、3S(スリーエス)=速さ、大規模さ、計画性です。したがって、オーナー企業のほうが決断のスピードが早いのでしょう。また、地方から出てきていますので、東京でのしごらみがないというメリットもありますね。

話は戻って、明治政府、徳川幕府を倒したのは、長州と薩摩ですので、やはり地方ということになります。この二つの共通点は、なにか関係があるのでしょうか。

今までの中央官僚の役人の代表、東京大学は上士を育てた大学です。東大は新しい学生を秋入学へ移行するそうです。なぜでしょうか？

結局、外国人の学生を呼び込みたいということなのでしょう。なぜでしょうか？それほど経営に困っているようにもみえませんが。

ここに、ひとつの情報があります。それは、東大卒の中央官僚のご子息たちの70%は海外の大学に入学しているというものです。東大出身の役人が東大を信用していないということなのでしょう。

最近の国の経済政策、地震に対する対応を見ていると、この時代に合わないなど感じる事が多くなりました。つまり、上士である東京大学の教育そのものが、この時代に合わない可能性が高いのです。したがって、日本より先にこうした時代を経験した、アメリカ、イギリスに子息を留学させているのではないのでしょうか？ちなみに、明治政府初代内閣総理大臣、伊藤博文はイギリスの大学に留学しました。これって、ただの偶然でしょうか？

徳川時代まで存在した武士は、刀の修行に汗を流してきたのでしょうか。しかし、明治になり刀狩にあうと、それまでの修行は何の役にも立ちません。時間の無駄だったのでしょうか？「いい国つくろう鎌倉幕府」は1192年を教えるものでした。しかし、社会にでて、まったく意味のない教育に時間を使ってきた無駄に気づきました。東大も、根本的な改革をしない限り、刀狩で滅び行く運命かもしれません。

橋の下から出てきた、新進気鋭の政治家。この時代を変える力になるのか、見守ってまいりましょう。上士の限界に来た日本、下士の登場を期待しましょう。

時流を読む

リスクに対する感性が高まれば、自ずと時代の「先」を読む力が備わってきます。最新ニュースをリスクマネジメントの視点で分析し、今後の展開や社会への影響を予想してみましょう。

秋入学、変革のうねり 沈む日本 危機感共有

東京大学の秋入学への移行表明が、大きなうねりとなって社会を揺さぶっている。グローバル化を担う人材を育てようとする東大の危機感に、経済界をはじめ社会全体が共鳴している。

明治期に創設された大学は、外国人教員を招きやすくするため欧米と同じ秋入学だった。1921年に会計年度に合わせ、春入学に移行して約90年。東大を突き動かしたのはグローバル化への危機感だ。秋入学が実現すれば海外からの留学生が増え、日本人学生は海外に飛び出しやすくなる。企業も秋・通年採用と対応することで、学生が学業に専念できる環境を整えるとともに、優秀な人材を採用する機会が広がる。ギャップターム(入学までの半年間)は町おこしなど国内の地域活性化の可能性も秘める。社会を覆う閉塞感を打破し、将来への展望を切り開く起爆剤としての期待が高まる。

国の教育・研究水準のバロメーターとされる留学生の受け入れ数。日本は昨年5月時点で10年前比75%増の13万8千人だったが、グローバル化が加速する中、世界に占める割合は減少。トップは欧米で、EUでは年20万人超の学生が助成金を得て出身国以外で学ぶ。米国は年約72万人の留学生を受け入れている。「海外から優秀な教員や学生を呼び込んで研究水準を高め、さらに優れた人材を引き付ける好循環をどう生むか。できない国は沈んでいく」。(内閣府総合科学技術会議の相沢益男議員)

東レ 炭素繊維5割増産 先端素材 世界で最適供給

東レは先端素材である炭素繊維の世界生産を5割増やす。2015年までに450億円を投じ日本、米国、韓国、フランスの工場で設備を新設する。日本では炭素繊維の利用率を大幅に高めた米ボーイングの新型航空機「787」などの需要増に備え、原料のアクリル繊維から一貫生産、増強に200億円強を投じる。

航空機や自動車を軽量化するため金属部品から炭素繊維を使った複合材料への置き換えが進み、市場が大きく伸びる見通し。需要の9割が海外にあるため顧客の近くで生産しニーズに応じて素早く供給、日本発の先端素材を世界に売り込む。

世界最大手の東レは4割のシェアを占め、三菱レイヨンや帝人を加えた3社では7割と日本勢が強い。東レは先行投資で首位固めを狙う。

地方発・オーナー系 開花

企業の成長を後押しする投資マネーは、実体経済を活気づかせる役割も担っている。日経平均株価が3万8915円の最高値を付けたのは、バブル期の1989年末。「失われた20年」の逆風をはねのけて、この間に株価上昇を達成した企業どこか。その顔ぶれをみると、成長株投資のヒントが浮かび上がる。

東証1部で、89年末から昨年末まで22年間の値上がり首位はニトリホールディングス。株価は13倍に急騰、2位のヤマダ電機も9倍になった。両社とも「良い品を安く」を旗印にしたデフレ時代の申し子だ。3位は日本電産、4位は久光製薬。業種は様々だが、いくつかの共通項がある。

まず、地方発で全国区の企業に育ったこと。集客、知名度面での制約を乗り越え市場を切り開いた。オーナー系が目立つのも特徴だ。また全般には内需型サービス業への評価が高い。

本コーナーは、(株)日本アルマック/日本リスクマネジメント・プロフェッショナル協会共催セミナー「全国リスクマネジメント研究会」の内容を編集したもので、日経新聞の記事によるものです。セミナーの概要、参加申込方法等については、お気軽にお問い合わせください。

<発行>

日本リスクマネジメント・プロフェッショナル協会

〒101-0038

東京都千代田区神田美倉町10共同ビル2F 27号

(株)日本アルマック内

TEL:03-5297-1242 FAX:03-5297-1244

URL:http://www.almac.co.jp

<製作>

株式会社日本アルマック

〒101-0038

東京都千代田区神田美倉町10共同ビル2F 27号

TEL:03-5297-1241 FAX:03-5297-1244

URL:http://www.almac.co.jp

※ご意見・ご要望は上記までお寄せください。